

## 受難節第1主日礼拝 説教 「主の安息の中に」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年2月21日

### 申命記 30章 15～20節 マタイによる福音書 4章 1～11節

灰の水曜日を迎え、教会の暦では、主のご受難を覚える受難節に入りました。イースターまでの四十日あまり、私たちは、主の御苦しみを覚え、悔い改めの毎日を過ごすわけですが、ただし、私たちがそうするのは、それを強く望んだからでもなく、また、そのような道を敢えて選び取ったからでもありません。それが私たちの進むべき道であり、主は今年もこの道を私たちに備え、共に歩もうとされているからです。そして、その私たちに導くべく、神様が与えられたものがこの日の御言葉でもあります。このそれぞれの御言葉で共通して語られていることは、その舞台が荒野という特殊な場所であること、そして、この特殊な状況に置かれたときのその対応です。そこで、四十年に亘るこの荒野での旅が終わりに近づいたイスラエルの民に向かい、神様が語ったことは数々の戒めや教えを守るということでありました。それは、守ればこそ、聞いているその人だけでなく、その子々孫々も神様の祝福に与ることになるからです。そして、その人々の背中を強く押したものは、今日の御言葉の直前で語られている「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」との御言葉でありました。つまり、神様の御言葉との一体性が人々をしてそうさせたということでもあります。従って、イエス様が徹底して御言葉に聞いているのはそのためであるということです。つまり、神様の独り子であるという特別な立場がそうさせたわけではないということですから、荒野におけるイエス様の振るまいは、神の民の一員としての自然な反応であったと言えるでしょう。

それゆえ、私たちにとっての御言葉とは、そもそものところ言えばそういうものであるということです。つまり、それをするしない、したいしたくない、といった、そういう類いのものではないということです。まただから、御言葉も先ほどの御言葉のその直前でこう語るのです。「私が今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものではなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、『誰かが天に昇り、私たちのためにそれを取ってきて聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが』というには及ばない。海の彼方にあるものでもないから、『誰かが海の彼方に渡り、私たちのためにそれを取ってきて聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが』と言うには及ばない。」と。つまり、御言葉の徹底は御言葉との近さゆえのことであり、それゆえ、その実行については難しくはないということです。つまり、私たちが御言葉に聞くということは、私たちの意志や考え、さらには、何を選べばいいかといった選択の問題ではないということです。

従って、私たちに与えられている今日の申命記の御言葉はこの前提に立って聞くべきものであり、それゆえ、私たちに求められている戒め、掟や法、教えの実行についても、このことをベースにして聞いていく必要があるのでしょうか。けれども、私たちの意志や選択の問題ではなく、守るのが当然であるかのごとく語られているところに、私たちはまた反発を覚えてしまうのです。しかし、私たちはそうであっても、イエス様は違いました。そして、そのことを明確に語るのがイエス様の十字架の出来事でもあります。それは、この「荒野の誘惑」の出来事においてもそうです。それゆえ、受難節を迎えた私たちはここでのイエス様の姿に自らを重ね合わせていかねばならないのですが、それは、そのイエス様に我が身を重ね合わせればこそ、イエス様に従おう、倣おうとの気持ち強くすることにもなるからです。そして、それは、私たちがイエス様のその気高さと清らかさに触れたから、ということでもあります。このイエス様の気高さ、清らかさは、イエス様が「命と幸い」に生きる道を歩んでいるからでもありました。それゆえ、私たちは、イエス様のその徹底した姿に神様に信頼する者の姿を見るのです。ですから、申命記 30:16で「私が今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入っていつて得る土地で、あなたを祝福される」と語られていることは、イエス様をしてそのような道を歩ませた一つの理由でもありました。

このことはつまり、神様からいただくその祝福を、極言すれば、この時、イエス様はこうして御言葉に聞いている私たちとの分かち合いを強く願ったということです。19 節に「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし」とあるように、子々孫々、神様を信じるというこの関係性において約束されているものが、御言葉が語るところの祝福であるからです。それゆえ、イエス様がこの気高くも厳しい十字架の道を選ばれたのは、イエス様と神様を信じる私たちのためであり、ですから、私たちが聖書の御言葉にどんなに反発を覚えたとしても、信仰において、今この時、イエス様の愛を感じ、イエス様のことを見ている私たちは、イエス様と同じように御言葉に従って生きていけると言えるのです。それゆえ、イエス様と同じように、と、私たちをして御言葉に徹底して聞いていこうと思わせるのはそれゆえのことであり、そして、その私たちに向かって語られているものが、このイエス様の「荒野の誘惑」という出来事であるということです。従って、悪魔と対峙し、一歩も引かないイエス様の姿勢は私たちの誰もが身につけるべきものであり、それゆえ、イエス様が口にされた「人はパンだけで生きるものではない」とのこの言葉が格言として世の多くに受け入れられてもいるのも肯けます。

ただし、そこには少々誤解があるようにも思うのです。なぜなら、イエス様が申命記 8:3 の御言葉を引用しているのは、物質的満足を退けて得られる、信仰の気高さ、その高い精神性を語るためではないからです。それゆえ、その直後に語られている「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」との御言葉も同じように考えることができます。イエス様がここで信仰の崇高さ、霊的生活の重要性を説くことを目的としていないのは、イエス様が置かれたこの時の状況を見れば明らかだからです。なぜなら、御言葉がそのイエス様について「40 日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた」と語るように、お腹が減ってへろへろの状態であったのがこの時のイエス様であるからです。ですから、悪魔から誘惑を受けたイエス様にとっては、食べる、ということにおいて他に選択肢はなかったはずなのです。しかし、それだけにまた、イエス様が悪魔の誘惑に負けなかったということは特筆すべきことでもあるのですが、けれども、そこで私たちが目を留めるべ

きはその勝ち負けではありません。では、御言葉がなぜここでこのようなエピソードを取り上げているのか、それは、私たちの信仰が、この神の子イエス様の姿を通して明らかにされているからです。そして、その姿とは、勇猛果敢に悪魔に挑み、打ち倒すような力強さをではありません。悪魔が近寄ってきて、ねえねえ、ちょっととイエス様に声をかけたということとはつまり、イエス様には悪魔につけ込まれる隙があったということだからです。つまり、悪魔からすれば、与しやすい存在に映ったということです。

確かに、結果だけを見れば、イエス様は立派に悪魔に打ち勝っています。けれども、本来近づくことすら許されないはずの神の子メシアに、悪魔が易々と近づいているところに、イエス様の小ささ、低さが表されてもいるのです。つまり、ここでのことは、メシアとしてのイエス様の小ささ、低さが前提となっているのであり、その勝ち負けはこの前提に基づいてのものであるということです。そして、このことはまた、イエス様が私たちとの共通項である人の子としての姿をもつて、ここで悪魔と対峙したことからも分かります。ですから、私たちがここで見つめるべきものは、私たちが見たい、聞きたいイエス様の姿ではありません。なぜなら、イエス様が悪魔と対峙する中で繰り返し仰ったことが「書いてある」というこの一言であるように、積極性を欠いているとしか思えないからです。つまり、イエス様は神様に言われるがままであったということでもあります。けれども、それが、悪魔は引き下がらずを得なかった理由でもあるのです。

それは、そこに現されたものが、私たち人間が拘る勝ち負けではなく、神様の力そのものであったからです。ところが、この荒れ野での出来事を通して私たちの多くが見たいと思うものはメシアであるイエス様の勝ち負けです。けれども、イエス様のそのすごさはそういうものではありません。イエス様が繰り返し悪魔に対し「こう書いてある」と仰ったように、そのすごさを支えたものは神様の御言葉であり、つまり、そのイエス様を守り支えたものは、イエス様のその外側にある御心であったということです。そして、御言葉はそのことを明確にするため、聖霊によってイエス様を荒れ野へと導くわけですが、それは、その過酷な試練の中で、イエス様が神様の御心の外ではなく

内にあるということをお私たちに伝えるためです。ですから、イエス様のここでの姿は、先ほど触れた申命記にも記されているように、御言葉から遠いところにある者の姿ではなく、直ぐ近くにある者の姿であるということです。そして、その姿とは神様に信頼し、委ね生きる者の姿であり、それが人の子としての姿であるということです。ですから、私たちがここで聞くべきことは、イエス様のことを立派だ、偉い、すごいと、褒めそやすことではなく、イエス様と同じように人の子として生きるということです。けれども、この過酷な状況下でイエス様と同じように生きるなら、そこで私たちの心に、その口に浮かぶ言葉とはいったいどんな言葉なのでしょう。それゆえ、ここに人の子としての私たちの小ささ、低さ、卑しさが現れ出すことにもなるのですが、けれども、イエス様は違いました。ではいったい何が私たちと違ったのでしょうか。それが、先ほど申し上げた内と外との感覚です。

私たちは、イエス様の徹底ぶりの理由をメシア、神の子としてのイエス様に求めるのですが、それは間違っはけません。ここでのことは、神の子メシアという立場を離れてのことではないからです。けれども、イエス様のメシアとしてのすごさは人の子としての姿を保った上でのことでもありました。つまり、私たちが遠くかけ離れた方がここで何かをしたというのではなく、普段からいろいろなことを聞いている私たちに向かって、そのイエス様がここで大切な何かを伝えているということです。そして、そこで大切なことはその言葉だけでなく、私たちとイエス様との関係性です。ここでは、そのことが神様とイエス様との関係性において明らかにされているわけです。この厳しい状況へとイエス様を導いたものが悪魔ではなく、聖霊であるというのはそういうことではありますが、それゆえ、そこに現されたものが神様の御心であったということです。そして、御言葉がそれを伝えるのは、その生涯において、私たちがまたイエス様と同じような状況に立たされることがあるからです。では、そのようなとき、私たちの気持ちはどこに向かい、そこで何を選択するのでしょうか。どれだけの人が強い意志をもって、正しい選択をすることができるのでしょうか。その点で心許ないのが私たちでもあります。それは、この弱く小さい私たちが、するしない、できるできない

いうところで問われ、自信を失ってしまいうからです。そして、ここでのイエス様も、小さく低いという点では私たちと同じでした。けれども、そこには一つの大きな違いがありました。それが、先ほど申し上げた内と外ということでもありますが、つまり、イエス様にはできて、自分にはできないと私たちが思うのはこの違いによるものだけということです。

私たちは自分自身の姿を常に御心の内側に見ているのでしょうか。むしろ、その反対に御心の外に自分の姿を見出そうとしてははいないのでしょうか。それは、そう思うことで、求められていることをしない自分を納得させ、また、できない自分を割り切ることができるからです。そして、そのように私たちに御言葉の実行を難しいと感じさせるものは、神様と私たちとの間に、私たちが意図的に置く距離であり、この距離がまた、私たちをしめて神様の御心も遠いものと思込もさせることになるのです。ですから、イエス様と私たちとの徹底ぶりの違いはここにその原因があるのですが、ただ、ではどうしたら私たちがイエス様のように御心に徹底して聞いていくことができるのでしょうか。それは、子どもが背伸びをするかのように大人びることではありません。そもそものところ而言えば、私たちが一人ひとり皆同じではありません。イエス様の仰っていることの全てを分かる者もいれば、それが難しい者もいます。それを強い意志でやり遂げられる者もいれば、その反対の者もいるのです。そして、そのすべてをひっくるめて、私たちが神様から人の子と呼ばれているのですが、ところが、私たちがこの人の子としての自らの姿をどのように見ているのでしょうか。何かをするしない、できるできない、というこの視点で見つめ、それがあたかも信仰の基準であるかのように考えてはいないのでしょうか。そして、それは、私たちが人の子であることに満足し得ないからでもあります。ただだから、私たちが人の子として歩み、生きたイエス様のいますところではなく、自分自身のイメージに添うところに立とう、立ちたいと強く願ってしまうのでしょうか。

ですから、そのような私たちにとって、荒れ野という場所は強い忌避感をもって見つめる、神なき世界でもあるのでしょうか。ところが、ここではメシアとして、しかも、人の子としての姿をもって、人の子である私たちが願うものとは正反対

の場所にイエス様は連れて行かれています。しかし、この直前の箇所、「その時、『これは私の愛する子、私の心に適う者』と言う声が、天から聞こえた」とあるように、この荒野での出来事は、メシアとしてのイエス様の真骨頂が明らかにされているのは間違いありません。けれども、その過酷さは、人の子の力では克服できるものではなかった、つまり、何かをするしない、できるできないというところで測ることのできるものではなく、神様にただおすがりするしかない状況、それが荒野であったということです。それゆえ、イエス様が繰り返し「書いてある」と悪魔に語ったことは、まさにただ神様におすがりするしかなか状況を言い表していると言えるのですが、けれども、その中で現されたものが、イエス様の御言葉への徹底でもありました。従って、メシアとしての真骨頂は、この姿の中に現されていたということです。つまり、イエス様のことを守ったものはメシアという特殊な立場、力ではなく、神様の御言葉であり、それを信じ信頼する人のこととしての姿であったということです。そして、それが神様に繋がって生きる人の子としての姿であり、そして、その人の子に過ぎないものをそのように御心に止めてくださっているのが私たちの神様であるということです。ですから、イエス様のこの荒野での出来事は、そのことを私たちに伝えるものであり、そして、このことをより鮮明に伝えてくれているのが、イエス様の十字架の出来事であるということです。それゆえ、イエス様と共にある者は、神様によって守られているのです。

十字架の出来事は、私たちの思いや考えに従うなら、誰一人として救われない現実でもありますが、それは、弟子たちも、イエス様を慕った多くの女性たちも、そして、イエス様のことを神の子だと告白したローマの百卒長も、誰一人としてイエス様の十字架を止めることができなかつたからです。このことはつまり、気持ちのある者も、強い意志を持った者も、誰一人としてふさわしい選択をすることができなかつたということです。そして、それは、十字架を前にした人々だけでなく、この日の御言葉に聞いている私たちも同じです。御言葉の語る荒野の現実が教えることは、この点を割りきり、誤魔化すことではないからです。けれども、その私たちに向かって、神様は何を語るのか。それは、御言葉は近くにあり、そ

れを実行することは決して難しくはないということ。そして、それは、私たちが神様の御心の外側ではなく、内側に置かれているからで、このことはつまり、できるとか、できないとか、するとかしないとか、そういうところで神様は私たちのことを見てはいないということです。

ですから、神様が気にかけることは、御言葉の内側に私たちがいるかないかということ。イエス様が人の子としてここで徹底して御心に従い得たのは、この御心の内側にいたからであり、けれども、それが分かっても、私たちはイエス様のようにはなれないと思ひ込んでいる。それは、神様の御心を、それをするとかしないとか、できるかできないかで聞いているから。そして、それは、赦される価値がないと思ひ込む私たちが、赦されているとの実感を得るためには、どうしてもそこで、するしない、できないというところで御言葉に聞いていこうとするからです。それは、私たちがそれだけ真面目で責任感が強いからでもあります。けれども、この誠実さは、どこに向かっているのでしょうか。それは、神様ではなく、拘る自分です。人をも、自分をも赦せないのはそのため。ところが、その私たちのことを、神様は、ここでイエス様が身を置いてくださっているのです。そして、それはあり得ない話ではなく、あり得る話であり、今も続いていることであるのです。それが、御心の内側に私たちが置かれているということであり、ですから、神様の御心の内側にあることが分かれば、誰もがイエス様と同じように生きていることを知るのです。そして、受難節はまさにそれを知らしめるために私たちに備えられてもいるのです。

外側ではなく、内側に生きている、人生に疲れ、絶望し、希望すら感じられな中で、祈りの中に御心の内側にある我が身の姿を見出すその時、ですから、そこで感じる希望が私たちの命を支え、また力強くするのです。そして、それは、イエス様と同じように、神様の守りと支えを知るからです。それゆえ、主イエスと共に十字架に進むことで、今年も神様の御心の中にある自らの姿をしっかりとその目に刻みつけたいと思います。祈りましょう。